

## 講演記録

## 上原良春・龍男・良司三兄弟の資料を通して見る戦時下の「自我」(2022年10月23日)

都倉 武之

ただ今、ご紹介いただきました慶應義塾福澤研究センターの都倉と申します。皆さんの前で上原良司と上原家の話をさせていただくことを大変光栄に思っております。私がこの10年間、様々な資料に接した中で感じたことを、少し皆さんにお話ししていきたいと思っております。

## はじめに——イントロダクションと自己紹介

本日は「上原良春・龍男・良司三兄弟の資料を通して見る戦時下の『自我』」、さらに他の学生資料と比較して、とタイトルを設定しておりますが、まずこの上原良春・龍男・良司と三人の名前を聞いたのは、今日が初めてという方もいらっしゃるかもしれません。

この資料群の最も有名なものを今日、上原幸一さんに特別にお持ちいただきました。会場の後ろに実物が来ていますのは、7枚の原稿用紙にペンと鉛筆でびっしり書かれた上原良司の「所感」と題する手記です。この文章は、上原良司が昭和20年5月11日、知覧の航空基地から飛び立つ前夜に、陸軍の報道班員だった高木俊朗という方から紙を渡されて「何でも思うことを書いてください」ということで書いた文章です。この「所感」が、戦後『きけわだつみのこえ』という大変有名な戦没者の遺稿集に収録されました。版によって位置が違ったりしますが、「所感」の前に書いた「遺書」とともに収録され、プロローグのような位置に掲載されています。様々な戦没者の遺稿が収録されている中でも、特に印象的な文章として注目されるようになったわけです。

そして、松本深志高校の中島博昭先生によって、『あゝ祖国よ恋人よ』という本にも収録されました。『きけわだつみのこえ』に載った2つの文章以外にも、さらに様々な資料が残っていることが、この中島先生の本によって広く知られることになりました。先ほどの「所感」は、出撃直前のいわば遺書ですので、「第三の遺書」と言われることがあります。その前に「第二の遺書」、「第一の遺書」があって、一番目の遺書は羽仁五郎の『クロオチェ』という本の見返しに書かれています。この本の中には、密かに思いを寄せていた女性への想いを暗号のように残していることをご存知の方もこの中には多いのではないかと思います。この『クロオチェ』の本の実物も、ロビーに展示して頂いています。上原良司の周りにいた様々な人物が紹介され、その関わりの中で彼が成長し、また様々な想いを抱いていたという、いわば「人間・上原良司」が最初に詳しく紹介されたのがこの本です。

「所感」の中に書かれている言葉が、今日、戦争のことを考える人々に強く訴えるものを持っているということが、この上原良司という人物の名前を広く印象づけているとすることができます。特に印象的な言葉を少し書き抜いてみました。明日特攻で出撃してこの世から自分がなくなるという状況の中で22歳の青年が書いた言葉です。「権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であろうとも必ずや最後には敗れることは明白な事実です。」—この戦争は負けるんだということをはっきりとこの文章の中で書いています。また、特攻というものを客観的に見つめる視座が現れているのが、次の一節です。「空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人がいった事は確かです。操縦桿をとる器械、人格もなく感情もなくもちろん理性もなく、ただ敵の空母艦に向かって吸いつく磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬの

です。理性をもって考えたなら実に考えられぬ事で、強いて考うれば彼らがいうごとく自殺者とでもい  
いましょうか。精神の国、日本においてのみ見られる事だと思えます。一器械である吾人は何もうい  
権利もありませんが、ただ願わくば愛する日本を偉大ならしめられん事を国民の方々にお願ひするのみで  
す。」—特攻という作戦、これがいかに通常の感覚からすれば考えられない作戦であるか、それは精神  
主義的な日本においてだけ行われることである。これは欧米の感覚からすれば自殺者と言われても仕方  
がない。理性的に考えたならば説明が付かない行為を強いられている、という認識を持ちつつも、翌日  
彼は出撃していく。そして後のことを託すというような言葉をここに書いています。そして、一番最後  
の部分で「明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で  
一杯です。」—この表現なども印象に残ります。私も最初読んだ時に「一人この世から去って行きます」  
という表現がとても衝撃的に感じられた記憶があります。しかも限られた時間の中で一気に書かれた文  
章であるからこそ、戦争をどう捉え、向き合っていくべきか考える時に注目される言葉になっているわ  
けです。上原良司の「所感」という文章は、特攻隊員が残した数多くの言葉の中でも代表的な言葉と紹  
介されることもあるし、非常に特異な、異端的な事例と捉えられる場合もあります。今なお注目され、  
多くのことを投げかけるこの言葉と、どのように向き合うべきであろうかということについて、今日は  
少しお話ししてみたいと思えます。今日初めて上原良司の言葉を知る方もいらっしゃるかと思えますの  
で、まず上原良司の残した言葉を紹介させていただきました。

さて、ここから本題に入っていきたいと思えますが、そもそも私はなぜこんなことを研究しているの  
か話してみようと思えます。私は慶應義塾福澤研究センターに所属しています。組織名の通り福澤諭吉  
の研究を第一の使命としている機関です。福澤諭吉はご存知のとおり慶應義塾の創立者であり、近代日  
本の成立に様々な影響を与えた人物として今日多様に研究されています。その主な資料を預かっている  
センターでありまして、その福澤から始まった慶應義塾という学校の歴史の資料も併せて収蔵しており  
ます。今日、この場所は長野県安曇野市のアーカイブですが、福澤諭吉個人、そしてそこから始まる慶  
應義塾という学校の歴史のアーカイブに私は勤めているわけです。しかし、ただ単に福澤という一人の  
歴史上の人物の研究や、慶應義塾という一つの私立学校の研究をしているわけではありません。福澤が  
問うた日本社会の様々な課題、慶應義塾という学校が、官立に対抗する私立として投げかけてきた課題  
ということを考えていきますと、実は日本の近代とは何だろう、近代とはどういう問題を抱えていて、  
どういう課題を今なお現代社会に残しているのだろうか、そういうことを考えていく「よすが」になっ  
ていくような投げかけをたくさん持っているということで、近代日本研究のセンターと自称しています  
(そのため英語名はCenter for Modern Japanese Studiesとなっている)。私自身の研究の本籍地は福澤  
研究、なかでも明治政治史上の福澤です。また実証的な史学、紙に書きつけられた文字、例えば伊藤博  
文から井上馨に宛てた書簡とか、憲法を制定するに当たって人々が集まって会議をした時の記録とか、  
国会の議事録とか、紙に残された当時の文献を中心に、実証的に合理的に資料を解釈して歴史を明らか  
にしていこうという学問をしてきました。

ここから上原良司に辿り着くまでに少し距離がありますね。本来は今申し上げたような、紙に書かれ  
た文字を紐解いて、日本近代史という大きい枠組みの中で研究をしていくことに関心を持っていました。  
しかし、福澤諭吉や慶應義塾を通して、大きな歴史が見えてくるということを考えるきっかけになる出  
来事がありました。それは2009年に全国4ヶ所で開催した慶應義塾創立150年記念の福澤諭吉の展覧会  
でした。この展覧会で慶應義塾の歴史を扱い、戦争の時代も展示する必要が生じ、上原家との繋がりが  
生まれました。展示をするためには、何か「実物の資料」が必要になるわけです。ある人からある人に  
送られた手紙を文字起こしてワープロに打ち込んで、それをプリントアウトして、「はい、これ」と

並べても面白くない。ですから見た人が「オッ！」と思うものを並べ、関心を持ってもらうきっかけを作る、そしてその先に様々な現代の問題を考えてもらう。それが展示の醍醐味であると考えようになりまして、実物の資料の重みを考えるようになりました。調べた結果がこうでした、という結論を示すとそれで終わりなのですが、実物の説得力によって、答えのない広い問題への投げかけを行う、それが展示の持つ力です。単にアカデミズムの世界において誰も今まで言っていなかったことを発表するという学者の仕事に留まらず、その研究成果が、次世代をどう育てていくのか。これからを担っていく若い人たちがそのことを知ったり、それをきっかけとして何かを考えたりしたことによって、これからの社会がどう良くなっていくのか。そういうことに繋がっていくのが展示であり、展示をしながら、あるいは「実物の資料」の重みを大切に考えながら研究していくという意識を持つようになりました。私は明治の研究から始めましたが、明治の近代化を考えると、そのあとに戦争の時代がやってくる。なぜそこに繋がっていったのか、ということ避けずに考えるべきではないか。歴史研究の世界では、戦争の時代というのは、そこに骨を埋める覚悟でやる一部の人の研究対象であって、多くの人はあまり寄り付かない。大学の研究の世界でも、戦争の問題は触れにくい特殊なものという空気が長くありました。しかし、戦争の時代は日本の歴史を考えてみた時に、日本史上最大の事件と言ってもいいのではないかと。日中戦争以降で日本人の軍属・民間人合わせて310万人が亡くなったと言われていますが、日本人の人口統計の数字さえ変わってしまうような大きな変化を与える出来事というのは、日本史上にそうそうないと思います。その意味では最大の事件と言ってもいい時代であり、このことをどう総括し、どう今日に活かしていくのかということは、歴史を勉強する上で一番重要で、考え続けなければいけない問題ではないか、と強く思うようになりました。福澤諭吉、慶應義塾の歴史を、もっと大人しく静かにやっているだけで十分一生を終えることができたと思いますが、展示や、「実物」に触れるきっかけを得て、私は少しずつ戦争の方に関心移って、この上原良司と上原家を巡る研究に深入りをしていきました。戦争の時代は最も主体的に学ぶべき対象であり、そしてこの戦争というものを多面的に考えるための素材が、慶應義塾の周辺にはたくさん残っていて、その価値を誰もあまり気づいていないのではないかと、慶應義塾の歴史を調査研究し、その実物の資料を扱うことが出来る立場にある私が、なすべきことがここにあると感じて、上原家の研究にどんどん深入りをしていって、今日ここに立っているというわけです。

## 1 調査は如何に始まったか？

今、画面に出しているのは今から11年前、上原家の調査を始めて間もない頃の調査メンバーと、三兄弟のすぐ下の妹である上原清子さんと一緒に撮った写真です。後方の真ん中に私が座っています。そのすぐ左に座っているのが、現在慶應義塾史展示館専門員になっている横山寛さんで今日この会場と一緒に来ています。こういう若手のメンバーで研究を始めました。ほかにも、私より前から長年上原家をめぐりながら関わりながら研究されてきた亀岡敦子さんもこの調査と一緒に参加されて、今日この会場にお越し頂いております。

私が上原良司を初めて知ったのは高校の時です。私が学んだ慶應高校は神奈川県横浜市港北区日吉にあります。大学と一緒に日吉キャンパスで1995年、ちょうど戦後50年の年に入学しました。私が学んだ校舎は1934年の築で、上原良司が大学予科生として学んだ当時と全く変わっていない校舎です。この画像は、慶應高校になっている校舎の前に上原良司が立っている写真です。高い学費はどこに消えているんだと疑問を感じるくらい何一つ変わってないですね。この校舎のあるキャンパスの地下には、海軍が作った連合艦隊司令部の地下壕が現存しています。このキャンパスは、実は戦争末期に海軍に一部施

設を貸して、巨大な地下壕を構築されてしまった。そして戦後もそのまま残り、今では貴重な戦争遺跡として保存が進められています。慶應高校の生徒の中では、この校舎は元々監獄だったという噂が流れていたほど、いかつい殺風景な校舎ですが、私はその校舎で学び、しかもその地下には海軍の地下壕がある、そういう戦争・戦前を強く意識できる環境の中で高校時代を過ごしました。私は元々千葉県の松戸市立の小学校・中学校で過ごしましたが、そこはベッドタウンで、学校は創立から10年程度でした。そういう歴史のない小学校・中学校から来ると、この空間自体を大変面白く感じて、文化祭で戦争期の慶應義塾について調査して発表するような機会もありました。その時に慶應の歴史を既に調べている方々に色々出会えまして、さらにこの地下壕の調査研究をずっとされている方々にも出会えまして、そういった方々から、この同じ校舎で学んだ先輩の中に上原良司という人がいることを教えられました。先ほど触りをご紹介した「所感」という文章についても、その時に触れたと思います。私は率直に言って高校生時には、あまり良司の言葉が刺さらなかったと言いますか、素直にそれを読めなかったところがありました。戦争に対して非常に反発する気持ち、批判を口にする良司の姿勢に反発するわけではないのですが、何かそのまっすぐさがまぶしいというか、社会に対しても少し多面的に捉えられるようになってきた気になっている生意気な高校生の眼差しからすると、まっすぐに戦争を批判することに対して、説明し難い違和感を感じたことを憶えています。そしてまた私が非常に引かかったのは、上原良司の言葉というのをこう読むべきだ、戦争をこれほど激しく批判している、平和を求めていかなければいけないメッセージとして、こう読まなければいけない、という正解のようなものが想定されて語られている感じがして、その正解を押し付けられているような違和感を覚えました。それでなんとなく良司の言葉を素直に読めなかった、という気持ちを持った記憶があります。また、戦争に対して関心を持ちながらも、その後歴史研究の道に入ってもそこを本籍地とはしなかった選択もその違和感の延長にあります。少し不謹慎かもしれないが、やはり物事を調べる・深めたいと思う時にはまず面白いと思う気持ちが必要なのではないか。面白いというのは、ゲラゲラという意味の面白いではなく、そのことに興味を持って自ら知りたいと思う気持ち。そういうものが大事で、それがないと嘘だと思います。何かを研究したり、こうだと自分の考え方を発表するにしても根底には自分が関心を持って、自分で調べたいと思って進んでいくことがなければ、その研究成果は嘘なのではないか、と私は思っています。この慶應という学校は戦争を乗り越えた建物がたくさん残っている。慶應高校の建物もそうです。東京港区にある三田キャンパスの図書館もそうです。この建物は空襲で焼け落ちて廃墟の姿をさらした時代がありました。それが復興された中で私は今、働いていますが、それだけの歴史を超えてきた建物で働いているある種の面白さを感じて日々出勤しています。この図書館に通って勉学を深めた先輩たちが、何年にもわたってこの大学を卒業していき、少なからぬ人たちは戦争によって命を落としていった。では、この同じ建物で、同じ風景を見て、同じ手すりを握って、先輩たちが過ごしてきたこの建物で、先輩たちは何を讀み、何を考えたのだろうか、ということを考えてみることによってその先に進んでいこうという興味が出てくる。そういう意味において私は、面白いという感情を素直に受け入れてもらえるということがない限りは、その研究の世界に踏み出す勇気が出なかった。慶應にそういうものがあることを知る経験を高校時代にしましたが、そこで止まってしまいました。

その先に進むきっかけになったのが何かというと、先ほどちょっと触れた2009年の福沢諭吉展です。福沢諭吉からスタートして近代の歴史が積み重ねられていった、その先に戦争の時代がある。その戦争の時代が福沢諭吉の考え方とどう繋がっているか、繋がっていないのか。どういう視点で戦争の時代を展示に織り込むか、という課題を私は解決しなければならなくなりました。そして、戦争期の慶應義塾に関する資料が、大学の中にあまり残っていないことに気がつきました。これを展示すれば戦争の時代

の慶應義塾は「なるほどこういう時代だったんだ」と分かってもらえるものが、大学の中に全然残っていない。調査も進んでいない、何が残っているかもよく分かっていない。その時、高校時代に触れた上原良司の存在を思い出しました。上原良司の「所感」は、高校の時にはもやもやして読んだわけですが、そのもやもや自体が実は一つの問いかけであって、戦争の時代をどう捉えていくのか、先輩たちはどう捉えたのかと考える時に非常に重要な投げかけをしてくれる資料ではないか、と思い出しました。それによって、戦争期の慶應義塾を考えてもらう展示として代表させてしまおう、ほかにごちゃごちゃと細かいものを並べるのではなくて、上原良司のものをポンと唯一の展示物としてしまおう、と考えました。慶應義塾で学んだり教職員として働くなどした者で、戦争で亡くなった方は現在2,200名以上確認されています。そういった一人一人に勿論できるだけ丁寧に思いをいたした展示をするのが一番いいわけですが、そういった背後の多くの人々の存在を感じさせる一点の資料、先輩たちが何を考え、どういうことに悩み、どういう運命を辿ったのか、そういうことを自然に感じてもらう一つの展示として、上原良司の「所感」を展示することにしました。

そしてこの「所感」をお借りすることをお願いするために、2008年に初めて安曇野を訪問しました。この時、私はただ上原良司という人の「所感」の原本を借りることしか頭になかったのですが、訪問した時にやはり慶應出身で戦没された二人のお兄さんについて清子さんから詳しく話していただきました。そして資料を見せていただく中で、お兄さんたちの資料も同じように大切に保管されていることが分かりました。私は良司のことばかり注目されて、忘れられてほとんど語られることのない二人のお兄さんたちが非常に不憫に思えてきました。家族にとっては良司さんの死も大事だけれども、お兄さんたちの死も同時に存在していて、良司さんだけが特別に大切な死ではなくて、お兄さんたちの死も同じように存在していることに気づかされたのです。また、三人ともたくさん資料が残っているのを見せていただきまして、その中には多数の慶應時代のものが残っていました。慶應のことを知っている身からすると、これはあの時に使うものだとか、これはこういうものだとか非常によく分かります。だからこそ、戦前も同じように学生生活があったんだとか、戦争中であってもこういうことは変わらなかったんだと、ヒシヒシと感じられる細かいものがたくさん出てきました。これを丁寧に記録しておくことによって、少なくとも同じバックグラウンドを持つ人は、戦争の時代をよりリアルに深く考えるきっかけを作ることができるのではないかと思います。この時は上原良司の「所感」を一点借りて、この展覧会において展示するというのがミッションだったのですが、私はほかの資料の存在が非常に気になってきました。

こちらは福岡の美術館で福沢諭吉展をやった2009年5月頃の写真です。戦争の時代の慶應義塾を紹介するコーナーで、ここに人が集まって並んで待っている。ここに「所感」が展示されていました。「福沢諭吉の展覧会」という看板ですが、「所感」を見に来たという方が結構たくさんいました。常にこのケースには黒山の人だかりができていたのが大変印象的でした。ですから広く社会一般においても、「所感」がいかにインパクトを持って受け止められているか、そして人々に対して深い投げかけを今日でも持ち続けているかを感じさせられた光景でした。

さて、この三人の兄弟が、皆慶應、皆戦争で亡くなっているのを知ることになったわけです。長男は上原良春さん、昭和15年の慶應医学部卒業です。次男は上原龍男さん、昭和17年医学部卒業。長男の良春さんは陸軍の軍医になり、次男の龍男さんは海軍の軍医になりました。三男の良司さんは学徒出陣で昭和18年に陸軍に入り、航空機のパイロットになり、昭和20年に知覧からの出撃によって特攻で亡くなりました。2009年に展覧会が終わり、翌年この三人の兄弟の資料を一体で目録化することを上原家に提案して、震災が起こったこともあってちょっと延びましたが2011年の春から目録化の作業を開始しました。これは作業を開始した比較的初期の様子の写真ですが、上原家の仏壇に三人の写真と位牌が祀ら

れているその前の空間を使って、資料を展開し、目録化する作業をしています。資料はこのように桐のタンスにまとめて収納されていたものから目録化をスタートさせて、そのあとは未整理のものなどにも手をつけて今日に至っています。

## 2 どのような資料が残されているか？

さて、この家の資料にはどのようなものが残っているのか紹介したいと思います。三人の兄弟が生まれてから亡くなるまでのありとあらゆる資料が残っていると言っても過言ではありません。特に有明小学校、松本中学校の頃のものからちゃんと残っています。良春さんが小さい頃は福岡や台湾にいた時期のものもあります。学校で使っていたノートとか、これは良春さんのお習字だと思いますが、こういったものが全部の教科残っています。こちらは受験勉強の反古と書いてあります。三人とも最終的に慶應大学に入りますが、松本高校とか海軍兵学校、陸軍士官学校なども選択肢の中にあっただということがわかるメモが残っています。数学の勉強をしている、その計算用紙なども大量に残っています。大変驚きました。こういうものが大量に出てきて、これは一体なんだと、ひたすら数式や計算が書いてある。所々落書きしていたりする。そういうものが膨大に残っている。一つも捨てていないという状態で残っているわけです。

それから慶應大学に入ってからのもも、もちろんたくさん残っているわけです。ノート類とか教材、こちらはカエルの解剖の絵。これは上原良司の学生証ですね。学生証というのは通常、進級や卒業時に学校に返さなくてはいけないものですが、彼の場合は学徒出陣というタイミングで、手元に残ることになったようです。これは受験票ですね。恐らく複数部用意して、書いたけど使わなかったものなのか、予備なのか分かりませんが、これは慶應の予科の受験票ですね。入学志願票と書いてあります。こちらは龍男さんの成績表。あえて選んだわけではありませんが、あまり良くない。不可がたくさん並んでいる。ひと頃非常に思い悩んで、あまり学校にも行かなかった時期があって、良くない成績表も残っている。ですが、そのあと医学部の助手に推されていて学校に籍を持ったまま、軍医として海軍に入ってきました。良司さんの場合は自分の思いを書き残しているようなノートがたくさん残っています。龍男さんもこういうものがあります。これは昭和16年12月8日、開戦の日の様子を書いている良司さんの日記帳ですね。これは16年8月の日付が書いてあり「希望ヲ持テ」とノートに書いてあります。時々思いを書き綴るようなこういうノートもたくさん残っていますし、こちらは次男の龍男さんの金銭出納帳メモですね。学生時代に何を食べていたのか、何にいくら使ったのかが事細かに記録されています。龍男さんばかり出汁に使っては申し訳ないですが、ランチ・ケーキ・ケーキ・パン・ランチ・ケーキ・ランチ・ランチ・ランチ…と食費が中心で、ケーキというのは和菓子のように。ケーキが立て込んできて、ここに「近頃またまたケーキを食い過ぎる。慎め」と自分で反省を書いています。それから三田新聞という学生新聞を読んでいたたり、交通費ですね。高円寺から吉祥寺の間、20銭でしょうか。靴の修繕とか散髪とか銭湯とか、ちょっとした記録ですが、この時代の生の学生の生活の様子を復元させてくれるような細かい記録が丁寧に残っています。また、紙に文字が書いてある資料のみならず、当時使っていたものも色々残っています。学生服はもちろんテニスラケットとか、あるいは諏訪湖で使っていたといわれる良春さんのスケート靴。当時はたぶん下駄スケートが普通の中で、ちゃんとした革靴でスケートをしていたのは非常に限られた学生たちだったと思いますが、こういったものも残っています。

そして学生時代の資料の次には、軍の時代の資料が残っています。軍の学校で勉強していた時のノートも丁寧に残っていますし、軍服などもあります。軍での日常というものを教えてくれる資料も非常に細かく丁寧に残っているのが、この資料群の特徴と言えます。特にどういう資料が興味深く感じたか、

いくつか取り上げてみたいと思います。

一番上のお兄さんの良春さんは、あまり自分の心、何を思っているかを言葉に書き残すタイプではなく、非常に真面目で堅いお兄さんという印象を持ちますが、写真が趣味で日常をかなり丁寧に写真に残している方です。これは医学部で勉強していた頃の授業風景とか手術をしている、実習をしているような写真。これは早慶戦、神宮球場での野球の応援席を撮っている写真です。こういう学生生活の写真もありますし、有明の地元の風景を写した写真もたくさん残っています。これは有明山を背景に一番下の妹の登志江さんをモデルにしている写真ですね。これはお隣の井ノ口さんを写した写真。これは番傘を持っている地元の小学生ですね。それから戦争の時代の世相を写し出すような写真も残っています。タスキを掛けている婦人会のお母さんの写真、出征する軍人を見送っている写真も残っています。それから自分の家族の写真も大変多く残っていて、上原家の前の道で龍男さん・良司さん・登志江さんと清子さん、親戚の青木房子さんと一緒に撮っている夏の風景。夏休みで帰ってくるわけですね、そういう時に遊んでいる風景。これは龍男さんが清子さんとシャボン玉遊びをしていて、真ん中に登志江さんが見えている、そういう写真です。ちょっとした家族の一コマをたくさん残しています。これは乳房橋の水が溜まっているところで遊んでいる子供たち、これは良司さんを夏の雲を背景に撮った写真です。有名なのはこちらの写真ですね。お父さんが日中戦争で召集されて軍医として大陸に渡っている時に、激励の手紙に添えられた写真で、良春・龍男・良司・清子・登志江と五人兄妹が「父サン頑張レ」の札を持っていて、それを裏返すとそれが大学生・予科生・中学生・女学生・小学生となっています。ユーモアのある面白い写真を安曇野の春の風景を背景として写している、非常に良くできた写真です。右端にはお手伝いさんに桜の蕾の枝を持たせて入れ込んでいるんです。こういった写真はネガが残っていて多くはライカで撮ったそうです。ライカのカメラは戦地に持って行って残っていないそうですが、このスーパースポーツドリーというドイツのカメラは残っています。特に良春さんがたくさん残しているのが写真、龍男さん良司さんも少し撮っています。

龍男さんは、絵が非常に上手で面白い絵をたくさん、あちこちに描き残しています。自作のマンガみたいなものを弟とか妹に与えて面白がらせたり、近所の子供達にも楽しいことを色々やってあげるようなお兄さんだったそうです。こちらは先ほど紹介した大量に残っている計算用紙の中に描かれている落書きで、よく見ると昭和11年2月26日と書いてあって、高橋是清らしき人物が青年に銃を向けられています。ちょうど昭和11年の2月頃というのは、一浪した龍男さんが二度目のチャレンジで受験する直前の時期です。その時期に起こったのが二・二六事件。その様子を恐らく戯れに描いたと思われます。ノートにも兄弟のことを描いた絵があったり、様々な面白い絵を描いているのが龍男さんです。こういったものを通して、小さな子供たち、自分の弟や妹たちとコミュニケーションを上手にとっていたのが龍男さんです。一方で龍男さんは非常に寡黙で、自分で思い悩んでいたところもあって、それは戦争という時代背景もあったと思いますが、人間にとって死とはなんだろうというようなことをあれこれ思索して書き付けたノートが残っています。天から降りてきた人間がそれぞれ自由に生き、早く谷に落ちて死ぬ者もあるし長生きする者もある、と絵も描きながら悶々と考えている。人間というもの、人生というもののは分からない。なんのためにあるのか、なんのためでもないのか、どんなふうに住生活すればいいのか、してもいいのか。「1000年もたてば生きていた者の誰がその時代の人々に思い出されるんだろう。すべての現在の人は消失し無となっている。何もかも無になってしまう。死ねば全てはないのだ。偉くなったからと言っても愚者であっても皆一緒だ」ということを書きつけたりもする。そういう姿を持っているのが、龍男さんという人でした。

また軍関係の非常に細かい資料がたくさん残っていて、先ほども紹介したようにこの資料群の特徴と

言っているかと思えます。こちらに出したのは、戦死公報です。戦死の電報が届くというのがドラマでも描かれたりしますが、上原龍男さんが亡くなったという知らせが届いた時に、実際に届けられた電報です。「上原龍男海軍軍医中尉十月二十二日ニューヘブライズ諸島方面に於て名誉の戦死を遂げられたり」とあります。名誉の戦死という言葉が実際に電報で使われていたことは、知識として知っていても、これを目にした時には非常に衝撃を受けました。この短冊は恐らく骨壺として届いた桐の箱に貼られていたか、もしくは葬儀の時に仮の位牌に貼られていたか、そういうふうに使われた短冊だと思います。木の板に名前が書かれているものは、遺骨代わりに軍から戻ってきたものであろうと聞いています。こちらは良司さんが熊谷飛行学校を卒業する時に、一緒に訓練を受けた、一緒に勉強をした仲間を書いてもらった寄書帳のノートです。良司さんは冒頭で読んでいただいたあの「所感」を書いた、非常に真っすぐな、苦しくなるほど真っすぐなああいう青年。顔立ちもキリリとしていて、そういうイメージからすると非常に気高い立派な青年とイメージしがちです。しかしこれを見るととっても人間臭い側面が見えてきます。「一筆啓上 四区隊に移って一つ机に並んで居眠りをする迄は顔も名も知らぬ君だった。中肉中背きりりとしたエキゾチックな顔。見るからに操縦の上手そうな気がしたが一緒の組となってみると案外下手で橋助教殿の小言を一手に引受けていた。好色者のくせに女は知らない等とおっしゃるお方。いかにもKOボーイのロマンチシストではある」。こんなことが書かれている。そういうように友達とおちょくりあって、楽しいとは言わないかもしれませんが、そういう人間関係がありながら訓練を受けていたという軍の時代の一コマを垣間見させてくれる、そういうノートです。一方で、こちらでも今回展示の中で実物が出ていますが、一日を振り返って上官に提出する日記で、上官の在り方に対して真っ直ぐに批判をしているんですね。上官というのは人格者じゃない、教育者じゃないということを書いてしまう。それに対して上官が躍起になって反論をしているのがこの赤字ですね。「お前のようなやつが任官するのか、先行きが恐ろしい。貴様のようなやつが一年後に任官するかと思えば国軍のために嘆かれる。貴様らの修養すべき時は現在なり。現在をおいて非ず」というような厳しい言葉が書かれています。ここには「未だ学生気分が抜けず」って書いてあります。お前の書いていることは不可だと、省すべし、反省しろということが書かれている。こういう激しい上官に対する言葉、そしてそれに対して上官が返してきた激しい言葉というようなものも実物として残っています。それが本になって活字になると、広く多くの人に見てもらえる一方で、この迫力というのは失われる。こういったところが展示の持つ醍醐味だと思うのですが、良司がその思いをどういう文字で書き、それに対して上官がどういう字面で反論しているのかは実物の迫力が訴えるものが大きいのではないのでしょうか。

そしてこの「所感」もそうです。この紙質、この書体を目にして感じられることというのは、『きけわだつみのこえ』の本で、活字で読むものとはまた違った、訴える力があるに違いないと思います。また、『きけわだつみのこえ』というのは、かなり改編が加えられていると言われていますが、この冒頭部分が「所感」の場合は省略されてしまっています。ここに本籍とか現住所・出身校が書いてあって、私のように慶應で学んだ者からすると、「ああ、明日必ず死ぬ」という時になって、何かを書いてくださいと言われた時に、自分の本籍を書き住所を書き、その次に出身校を書いている。最後の瞬間まで自分は学生なんだという意識がしっかりと自分のアイデンティティの中にあることが、ここで確認できます。これはこれで大変ある種の衝撃を与えられた一行です。また最初はペンで書いてあるんですが、途中でインクが切れたのか鉛筆に代わるんですね。実物をご覧いただければ分かると思いますが、恐らくインクを補充する余裕も心になかったのではないかと、そういうことも実物を見ることによって知ることができるわけです。

上原家の特徴的な資料としては、とにかく手紙が残っているんです。数千と言っている数の手紙が残っ

ています。両親に対して子供が送っているもの、その返事、兄弟間で送っているもの、親戚や知人から来たもの送ったもの、そういった手紙がもの凄い密度で残っています。普通、歴史資料として残っている手紙は一方通行でしか分からない。それでも片方だけでも存在していることによって明らかにこういうことが言える、と言い切ってしまうのが歴史研究ですが、上原家の場合はそのやり取りを全部と言っていいほどたどっていくことができます。一方通行ではなく、相互の連絡を全部、家族間についてはたどっていくことができるのです。家庭内の他愛もない話もたくさんあります。学校でこういうことがあった、軍でこういうことがあったとかいうことを、その後繰り返し話題になったりしたようなことを遡って裏付けを取ることができる、非常に稀な資料群だと思います。慶應ということで共通しているバックグラウンドを共にしていると、例えばこれは龍男さんが大学に入って間もない頃の葉書ですが「早慶戦を初めて見ました」と書いてあります。「ラジオで聞いた応援歌の中には私の声も入っていたんですよ」なんてことを家族に書き送っている。当時から早慶戦を見て、家族に報告している。今の若者、実際に慶應で学んでいる、あるいは早稲田で学んでいる、六大学で学んでいる、あるいは大学生で大学野球に関心があるでもいいですが、自分と何か接点を持つと、あの時代はこうだったんだということを急に深刻に受け止められる。自分に遠くないものとして受け止められる。こういうものが一つでも多い方が、戦争の時代というのを真剣に考えることができるのではないか。そういう意味においてこの上原家の資料は大変貴重だということを申し上げたいのです。

### 3 上原家資料はなぜ貴重か？

上原家の資料はなぜ貴重か？ 今も既に貴重だ貴重だと盛んに申し上げましたが、やはりこの資料はとにかく密度が高い。膨大でかなり網羅的な資料が残存している。一つ一つの資料の背景が復元できる。後の時代になって80年も90年も経っている今になって、ある葉書に書かれていることが何を意味しているか、細かいことまで全部わかります。

上原家の庭の裏には、当時兄弟が使っていた離れが移築されて今でも残っています。その部屋の戸棚などには、今でもそのまま兄弟が使ったものが入っているような状態で残っている部分があります。まだまだ手を付けてないような状態で、様々な資料が残っています。例えば鞆を開けると、これは良司さんの鞆ですが、大学時代に使っていたノートや教科書が、その当時恐らく仕舞っていったそのままの状態が出てくる。先ほどご覧いただいたこの父さん頑張れの有名な写真で、彼らが持っている紙のカード、この紙のカードさえ残っている（一枚だけ欠）。これは宛先がお父さんの寅太郎さんで「遺品」と書かれていて、ここのところには「鹿児島県河辺郡知覧局気付何々部隊」と書いてあります。要するにこれは特攻で知覧から出撃した後に良司さんの遺品が家族の元に返された時の包み紙です。別に行李があって、行李についていた上原良司自筆の荷札まで残っています。これは良司さんの香典帳です。昭和21年5月15日に葬儀をした時の香典帳。「特攻院殉空良司大居士」、これを初めて見た時も大変衝撃を受けました。こういう戒名なのです。もちろん、ほかの兄弟のものも残っています。

こういうように細かい資料が残っていて、伝えられている話が丁寧に裏付けられる、繋がっていく。ただある一点の資料が残っているよりもその背景も合わせて検証できることで深く感じることもできるのです。そして、これらの資料が何故残ったのかを考えることは大事なことだと思います。もちろん、生きている当時に受験勉強の反古などというものは、本人が捨ててしまえばそれで終わってしまうのですが、そういうものを取ってあったということ自体が珍しいことです。しかしそれが戦後になっても、そして戦後80年を迎えつつある段階でなお残された、80年の間にたくさんの人たちが介在していて、それでもそれが捨てられなかったことはどういうことなのだろうか、と考える時にこの上原家の歴史とい

うものを単に良司の「所感」一通ではなく、もっと広い視野で捉える必要があることに気づかされます。

良司は昭和20年5月に特攻で亡くなるわけですが、一番上のお兄さんが陸軍に入隊するのが昭和15年4月、昭和17年の10月に龍男さんが海軍に入る。そして最初に訪れるのは、次男龍男さんの戦死です。海軍伊182潜水艦で撃沈されて亡くなったのが昭和18年10月のことです。文書館のロビーに出ている展示でも龍男さんの仇を討つと良司が書いているところが出ていますが、龍男さんの死を知った上で良司さんは陸軍に入っているわけです。昭和18年12月に良司は学徒出陣で陸軍に入っています。そして昭和20年5月に亡くなる。これで終わりではない。昭和20年の9月になって長男の良春さんはビルマで戦病死していた。しかし、その連絡はすぐには届かずに上原家にそれが到達するのは1946年の初夏です。戦争が終わった時には、家族は良春さんは生き残ったと思ったわけです。実際にまだ存命であった。しかし、一か月後に良春さんは亡くなられていた。しかも残酷なことに、1946年になると良春さんが帰ってくるという誤報が届いた。寅太郎さんはビールを用意して帰りを待っていたけれども、それは実は別人だったとわかり、その後まもなく訃報が届きました。ですから、三兄弟のどの死もかけがえのない命ですが、まず真ん中のお兄さんが亡くなっている。その上で良司さんが亡くなっている。さらに最後は、良春さんまでというのは戦後になってから届いたことです。「所感」だけ見ていると、一部分しか見ないことになってしまうわけですが、家族にとっては、この三人の死というものが立て続けに起こっていく。それを経て家族はあの資料群を80年間、守り続けて今日に至っています。

これも調査の中で出てきたものですが、父・寅太郎さんの昭和21年7月16日付の日記に良春さんの死が届いた時の記述があります。「大塚サンヨリノ手紙ニ有明ノ上原サンノ息、陣没気毒ニ堪エズ... 誠ニ晴天ノ霹靂ナリ... 帰還ヲ前ニシテノ死亡定メシ彼モ残念ノ想ナリシナランモ致方ナシ、只アマリニ運命ノ神ノ悪戯ヲ□ツノミ」と書き付けられています。資料が残っていることが持つ意味を考えると、良司さんだけではなく、家族全体の歴史を残しておくことで上原家の資料の価値がさらに大きくなるのではないのでしょうか。

#### 4 上原3兄弟それぞれの「自我」

今回の話では「自我」をタイトルに入っていますが、色々な資料が残っていることを踏まえて、3兄弟それぞれの自我はどういうふうに分えられるか、ちょっと考えてみたいと思います。これらの資料を丁寧にしてみると、10年かけてよそのご家庭のご兄弟のプライベートな部分を眺め続けていて、戦争が無ければ大変悪趣味なことをしている気分が苛まれたりもしますが、上原家の3兄弟一人一人に個性があったということに気付かされます。

良春さんは大変責任感溢れる人物。5人の兄弟の中でも年齢が特に上だということもあって、家族を支えていくという責任感にあふれている。逆に、その責任感がある、自分はいかあるべし、という自我をしっかり持っているからこそ、色々なことをあまり言葉にしない、言葉として書き残さないという人でした。私は今、こういうことで悩んでいるとか、こうしたいけどこうならない、そういうクヨクヨした心情を見せるべきではないという倫理観を強く持っていたので、文字化しないという人物だったのではないのでしょうか。その代わりに、写真など言葉ではない表現力に長けた部分を残してくれたのだと思います。

次男の龍男さんは、大変優しくてシャイな青年だったと感じられます。ユニークな絵をたくさん残して、小さな子供たちに寄り添うようなことが好きな青年だったようです。一方で色々と思いを悩む気持ち、青年としての悩みを密かに表現しているような、そういう内気な青年だったという感じがします。

良司さんは、気軽な三男坊で、心情を非常に素直に出すことをためらわない青年だったと感じられま

す。書き残しているノート、日記。自分のために書き残しているものであっても、龍男さんは大変奥ゆかしく書いていますが、良司さんはハッキリとものを言う青年として育っていく様子が分かります。上原家ではご両親が手紙を盛んに出して、しっかりと返事をしなさい、手紙の返事を書かないのは犬畜生以下だと常々仰っていて、そういう教育を受けていたと清子さんも仰っていました。言葉として表現する習慣を元々持っていた。中でも良司さんは、自分の気持ちを非常に素直に表現する習慣を持っていたことが、兄弟全体を見ていくことによってわかってくる。軍隊という制限された空間、環境の中で、良司さんは表現することへの渴望のようなものを持っていたと考えられるのではないのでしょうか。書く機会が生じれば、それを逃さずに素直に自分の気持ちを表現することができ、書き慣れていたからこそ、あの最後の時に紙を渡されて、その気持ちを流ちょうに淀みなく言葉にすることができた、と考えることができるのではないかと。その結果残され、広く知られることになった良司の言葉なのだと見ることができるのではないのでしょうか。

良司の言葉としてどういったものが残されているか改めて紹介しますと、第1の遺書と呼ばれているのは昭和18年9月22日付です。10月21日にあの有名な神宮外苑での学徒出陣の壮行会があるわけです。そして12月1日に彼は松本の連隊に入るわけですが、これは9月22日、東條英機のラジオ演説で学徒出陣が決まったことが発表されたその夜に書かれた遺書です。そして、本文に○をつけて恋人への想いを書き残す。○をつけたタイミングはいつなのか分かりませんが、1943年9月22日というタイミングで文章を書いている。これは学徒出陣、自分が軍隊に行かなければいけないことが決まった夜だということが分かります。そういうタイミングで自分は何かを書き残したいと思い、それを素直に書き付けたものがこの第1の遺書だと考えられます。そして第2の遺書。良司はノートにたくさんいろんなことを書いていますが、本人が明確にこれが最後だと思って、「遺書」と位置付けた形で実家に残した遺書。昭和20年4月、最後の帰郷の時に、実家に残していったものと我々のチームでは理解しています。遺書という形で書くものは、特にこの当時の戦時下の学生・軍人の立場からすると、もう次がないというタイミングで書いたと考えるのが自然です。最後に帰郷した時に、もうこれが最後だと、家であれば自由に書き、自由に残すことができるということで書かれたものだと推測しています。そして、我々の調査でいくつか今まで知られていなかった資料が出てきました。こちらは最後の葉書で、1945年5月に出されたと思われるご両親や清子さん、登志江さんらに宛てた葉書です。残念ながらコピーしか残っていません。これらには遺書ほどの重い言葉はない。ただし、ここのところに「遺書ハ入学記念アルバムの中にある」と書いてあって、ご存知の方もいると思いますが、自宅には色々な仕掛けがしてある棚があり、遺書を読むと今度は先ほどの第1の遺書『クロオチェ』の本が隠してある棚にたどり着きます。そのスタート、最初の遺書がある場所というのを書いてあった葉書が送られていた。この葉書は軍の公認で出せる、軍事郵便として出せる程度の内容。ちゃんと検閲済みになっていますね。軍事郵便として出された最後の葉書だと思いますが、そこにこのスタートが示してあって、自宅に届くと先ほどの遺書にたどり着くという仕掛けになっていたと考えられます。それからこちらは、2018年10月に発見されたもので、実物はなくて写真しかないのですが、1945年5月9日付になっている最後の手紙です。「父上様母上様 長らく御世話になりました。小官振武隊員として数十時間の中に出撃致します。何のすることも出来ず先立つ不孝を御許し下さい。必ず龍兄さんの仇は討ちます。遺書は離れの入学記念アルバムの中にあります。」と、またここで遺書の存在を書いている。遺書に行きついてもらえば自分の書きたいことは書いてあるということです。恐らくこれも軍の公認で最後に出した手紙だったのではないのでしょうか。同じ時に原節子のブロマイドの裏に辞世の句が書かれているものが見つかりました。同じ時に送られたセットのものではないかと思われるのですが、出てきました。原節子の裏に書かれている意味をどう読み解くかも

色々考える余地があるかもしれません。ここに書かれている辞世の句は「ますらをの のぞみはたしてちるときは わがたらちねも えまれららん」ということで、「所感」とか遺書に書かれている激しさは必ずしも感じられません。そして最後の「所感」がやってくるわけです。この「所感」は予期していなかったものです。出撃の前夜になって報道班員の方から紙を渡され「好きなことを書いてください」と言われて、そのチャンスが生まれた。元々これが予定されていたわけではないです。だから本人の中では最後に想いを全て込めたものというのは、実は第2の遺書だったと考えるのが自然なわけです。繰り返しあの遺書を読んでくれというレファレンスが、その後の手紙についている。けれども最後の瞬間になってもう1回書き残すチャンスが良司に与えられた。それによって生まれたのが、あの「所感」という文章だった。7枚の紙に一気に書き付けられた文章がこうやって生まれていったと読むならば、この言葉は、書き残したいという良司の想い、最後にその渴望みいたなものが全部注ぎ込まれた文章だと考えることができます。

良司は言葉を書くことに非常に強い執着が感じられます。彼は書きたいと思ってチャンスを捉えて書いた人だと思います。龍男さんにはその激しさはありませんが、最後の帰郷時にちょっとした絵を描いており、また身辺についての簡単な遺書も残しています。良春さんは、やはり死後を想定した遺書はちゃんと南方に発つときに残していますが、想いという部分については語らない。それが彼の確立した自我だったと言えると思います。良司は書き残すことを望むのが自我だった。軍事郵便には検閲を受けるので書けないけれども、彼が「所感」を書き残した時には、報道班員から紙を渡されたから書き残せた。検閲がなかったから残った、とよく言われますが、書き残そうという意思があれば実家に帰る時に、良司のように書くことができるし、内地にいる場合は知人に託して外から投函するとか、あるいは海軍ですと士官が遊びに行くことができる家が決まっていて、そういう家の人に代わりに出してもらう、その家の人の名前を出してもらう、色々なやり方があります。言葉を何とかして残そうと思ったのなら残す方法がゼロではない。軍の中でも立場が色々あり、学徒出陣でいきなり南方に送られたりしますと手段は乏しいですが、良司は残したいという強い執着があるからこそ、自分で選択肢を探しこれだけ色々な形で言葉を残す。残そうという意思があり、それを実現する強い意志がある。自分の想いを何とか言葉にし、他者に、後世に伝えたいとヒシヒシと伝わってくるのが、資料の残り方から見えてくると思います。逆に言葉を残さなかった人たちがたくさんいることにも気付かされます。その人たちの存在も決して無意味ではない。どのような想いだったのか、と考えたり、言葉を残さなかったということの意味を考えることはできます。良春さんはまさにその代表例だと思います。それから私が調べたほかの資料群の中では、楽譜を残した学生がいます。東京芸大では戦没した学生たちの楽譜をコンサートで披露する取組が最近行われています。言葉として表現することはしないけれど、自分が何らかのものを残したいという気持ちを形にした人たちがいます。言葉を理性的に読むというのは、まさに近代的な営為かもしれませんが、そこにこだわり過ぎると当時の人たちが何を考えていたのか見えなくなる部分もあるのではないのでしょうか。言葉に強い執着を持っていた良司から見えてくることだと思います。これは結局、国家と個人というものをいかに規定するか、国家の元で軍人として働く自分がいかにあるべきかを理性的に考えると、良春のような行動になるかもしれません。逆に国家と個人というものは、おかしいと思う時にはおかしいという声を上げるべき関係なのだ、それが人間として誠実な生き方だと信じれば良司のような表現の仕方になるのかもしれない。言葉がどう残っているのか残っていないのか問うことが、近代的な自我を日本人がどのように形成したか考えることに繋がっていくのではないのでしょうか。三人の兄弟を見比べているだけでも見えてくると思います。

おわりに——戦争体験を継承し、無数の死を後世に生かすには？

戦争体験を継承し、無数の死を後世にどう生かしていくか、と言われて久しいわけですが、戦争というものはいけない、人の命、尊い命が奪われる戦争はなくしていかなければならないということは、恐らく誰もが同意する。しかし、現在の国際情勢を挙げるまでもなく、今なお戦争が繰り返されています。上原家の資料を見ていくことに何の価値があるのでしょうか。1人の上原良司という稀有な素晴らしい人がいて、彼の言っていることを後世に伝え、それによって戦争をしてはいけないと問うていくという考え方もあると思います。しかし、彼だけが特別だったのか、彼のような人がほかにいなかったからあの戦争が起こってしまったのか。彼を特別視すると、あの戦争は避けられなかったという結論になってしまいます。そうではないのではないかと。良司は素直に気持ちを表現する、書くことへの渴望という点で特別だったかもしれませんが、感性が特別だったとはあまり思われません。ほかの人たちにも関心を向けていくと、多様な個人が存在した、その多様な個人の中にも戦争に対する様々な想いがあって、ただそれを表に出す人はごく限られていた。有明村の同年代の若者の中に他にも戦没者は大勢います。それらを丁寧に具体的に想像していくことによって戦争を避ける道はもしかしたら生まれてくるのではないかと考えます。戦争というものをこう捉えなければいけない、何か正しい答えがある、それを後世に伝えていかなければいけないということではなく、この時代の人は何を考えたのだろうか、どうして戦争を避けられなかったのかという答えのない問いを考え続ける模索こそが、戦争を避けるために継承すべき営為として重要なことではないか。何か決まっている答えがあって、「皆さんこれを将来に伝えていきましょう」ということではない。戦争はどうしたら無くなっていくのだろうか、どうして戦争が起こってしまったのだろうか。そういうことを自分事として問い続けていく、模索していくことが、戦争の時代に学ぶことの本当の姿勢なのではないか。戦争体験、資料の継承。なぜ資料を残していくのか、なぜ上原家のこの資料が大切なのか、そういったことの意義はまさに、問い続けていく、考え続けていくことに直結する資料になりうるからだと考えています。ご清聴ありがとうございました。